

## 『冒険者たち』

— Les Aventuriers —

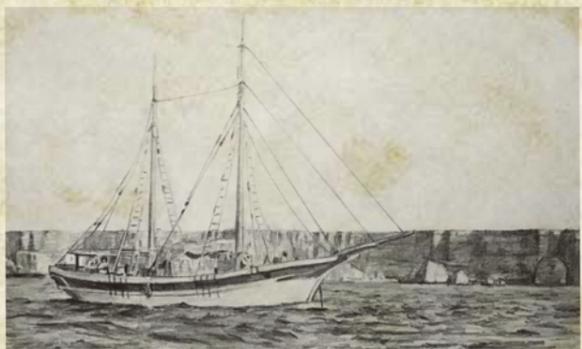
(1967年・公開) ※DVDレンタル・販売あり

夢に情熱をかけ、夢に破れた男2人・女1人が船を借りて海に沈んだ財宝探しの冒険に出る

一人の若い女性がパリ郊外の廃車置場を訪ねてきた。気に入った鉄くずを譲ってもらおうと工房の男に声をかけると「売り物ではない」と断られる。そこに一本の無線が入り、男は赤いトラックに乗り込むと、女は「暇だから連れて行って」と男の作業を手伝うことになった。杭を打ち、赤と白の縞々のポールを立て、無線で準備完了連絡。しばらくすると飛行機が飛んできて、2人が立てたポールのゴールを潜り抜け、華麗なアクロバット飛行を披露する。ヒコキ野郎はマヌー、パリの飛行クラブのインストラクターで、ハンサムでキザな若い男。トラック野郎はローラン、画期的な自動車エンジンの開発に専念する中年男。年齢も性格も全く違っていたが、実の兄弟のように仲が良く、お互いの仕事や夢を応援しあう関係だ。

## 海に囲まれた昔の要塞を買って暮らしたい

アフリカ・コンゴの港からスクーター船に乗り込んだ3人は、酒を飲み、踊り、ケーキに見立てた帽子で誕生パーティをしたり、読書したり、水を掛け合ったり、空ビンを投げて銃で撃つたりと陽気にバカンスを過ごしながら宝探しを始める。ある日、レティシアが1人の時を狙って、1人の中年男性が船に乗り込んでくる。彼はベルギー富豪を乗せた飛行機のパイロットだった。4人で山分けを条件に手を組むことに



ボロのスクーター船に乗り込んでロマンあふれる財宝探しへ

借り、鉄くずで「自由人しかわからない」芸術作品を制作していたのだ。ローランは自分のエンジンを載せたレーシングカーに乗り、テスト走行をするが結果は微妙。もう少し改良を重ねる必要があった。資金が欲しいローランと失業のマヌーは、レティシアを誘い、ルーレットカジノで一儲けを狙うが、結果は散々たるもので、失望のあまりレティシアを忘れて帰ってしまう。

数日後、大きなトラックを伴い、ローランの作業場に戻ったレティシアは「貯金で個展を開く」と作品をすべて持ち出していく。大規模で豪華なオープニングパーティーにマヌーとローランも招待されたが、テレビ取材を受けるレティシアの自信あふれる姿に気負いし、声をかけることもできず帰っていった。資金さえあれば……そんな思いの中、マヌーは飛行クラブの会員である保険屋から聞いた、新たな儲け話を思い出す。

数年前のコンゴ動乱、飛行機で国外脱出を図ったベルギーの富豪が、莫大

する。1人1億フラン以上。「何に使う?」「マヌーの質問に、レティシアは「家を買う」と答える。子供の頃からの夢で、海に囲まれた昔の要塞を買いたい、そこで暮らすのだと言う。「大きな家に1人?」一緒に暮らそう」というマヌーの優しい誘いをはぐらかすレティシア。彼女はローランと一緒に住むことを望んでいたのだった。ついに沈没した飛行機を発見。陸地では彼ら4人の様子を伺う男たちがいた。

ラ・ロシエルの沖合に浮かぶ  
フォール・ボワヤール要塞

飛行機、レースカー、船で沈没船の財宝探しと、空陸海すべてを網羅する今回の映画は、ジョゼ・ジョヴァンニの小説「生き残った者の掟」からヒントを得て映画化した作品で、それぞれの夢に破れた男2人・女1人の3人組が、共に宝探しの冒険へ旅立ち、その結果の運命を描いている。原作小説はローランが冒険から戻ったところから始まり、映画が重なる部分は後半35分ほどの部分。言うなれば、この映画は「エピソード0(0.5?)」とも言えるだろう。原作は男3人だが、映画は男2人・女1人に変更したおかげも

ローランはボクサー出身俳優L・バンチュラ、マヌーはA・ドロン、レティシアはJ・シムカスが演じている



(イラスト: 吉崎 英二郎)

な財産を乗せたまま海に墜落。莫大な財宝が海底に眠っているというのだ。調査の結果、今度こそ間違いないと確信した2人は、財宝探しの夢に向かって準備を始める。そこに疲れ切ったレティシアが戻ってきた。作品は酷評、個展は大失敗だった。「気分転換の旅に出かけよう」とレティシアも連れて行くことにする。

あつて大ヒット。「明日に向かって撃て!」(1969年)、「無宿」(1974年)、「黄金のパートナー」(1979年)、「冒険者カミカゼ」(1981年)、「彼女が水着にきがえたら」(1989年)などの映画では、主人公格の関係性に影響が見られる。その他にも、宮崎駿監督は「カリオストロの城」(未少年コナン)、「紅の豚」、岩井俊二監督は「スワロウテイル」,リュック・ベッソン監督は「グランブルー」,ウォン・カーウァイ監督は「恋する惑星」、松田優作主演映画「蘇える金狼」など、多くの映画にオマージュ的なシーンを発見できるだろう。

レティシアが住みたがっていた要塞はFort boyard(フォール・ボワヤール)で、フランスの西海岸ラ・ロシエルという海沿いの古い街の沖合にある。幅31m、横68m、高さ20m、花崗岩と石灰岩でできている。対イングランド艦隊の要塞として1801年に計画、1804年にナポレオンにより建設の命が下りる。途中「エクスロードの戦い」で30年間建設中断になった末、総工費800万フラン、現在の金額で約2億ユーロ以上もかけて1857年によく完成したが無用の長物と化した。1870年から海軍の刑務所となり、

ニューカレドニアへ島流しする前の収容所として使用された後、1962年5月に歯科医が2万8000フランで落札した。子供と数回キャンプした後は、船で島の周りを回るぐらいだったという。約80年間ほぼ放置状態だったため海鳥の領域になり、風に運ばれた種子が発芽して成長し、特に石の接合部に植生して、建物の構造を著しく劣化させた。

1988年11月に150万フランでテレビ製作会社が購入。テレビ番組のロケ地として運営独占権を確保した上で、翌年7月に海事地域評議会に売却。本格的な改修工事がようやく実施された。体を張ったゲームに参加するテレビ番組の大ヒット(日本未公開)でロケ地として脚光を浴びて、人気観光スポットになったが、一般人は上陸できず、観光船で周遊するだけだ。遠目からは長崎の軍艦島のように、一つの船に見えるだろう。周囲は砂洲で浅いので港から観光クルーズに参加するしか近寄れない。時期によっては歩いて近くまで行けるらしい。現在の島の様子を知りたい人は、YouTube検索でゲーム番組の動画の一部を見ると良いだろう。

(クルーズ映画ライター あいさわみき)